

# 髓

鞠久類

資料編



目次

よだかの星	ごん狐
羅生門	・
姐の効用	・
檸檬	・
山月記	・
高瀬舟	・
歳棚に祭る神	・
走れメロス	・
舞姫	・

堕落論	•	•	•	•	•	•	•
銀河鉄道の夜	•	•	•	•	•	•	•
坊っちゃん	•	•	•	•	•	•	•
学問のすすめ	•	•	•	•	•	•	•
こころ	•	•	•	•	•	•	•
人間失格	•	•	•	•	•	•	•
遠野物語	•	•	•	•	•	•	•

ごん狐

新見  
南吉



# 一

これは、私が小さいときに、村の茂平もへいというおじいさんから聞いたお話をです。昔は、私たちの村の近くの中山なかやまというところに小さなお城があつて、中山さまというお殿様がおられたそうです。

その中山から少し離れた山の中に、「ごん狐きつね」という狐がいました。ごんは一人ぼっちの小狐で、しだのいっぱい茂った森の中に穴を掘って住んでいました。そして、夜でも昼でも、あたりの村へ出てきて、いたずらばかりしました。畑へ入つて芋を掘りちらしたり、菜種なたねがらのほしてあるのへ火をつけたり、百姓ひやくしょ家の裏手につるしてある唐辛子とうがらしをむしりとつたり、いろんなことをしました。

ある秋のことでした。二、三日雨が降り続いたその間、ごんは、外へも出られなくて穴の中にしやがんでいました。

雨があると、ごんは、ほつとして穴からはい出ました。空はからつと晴れていで、百舌鳥もずの声がきんきん、ひびいていました。

ごんは、村の小川おがわの堤つつみまで出てきました。あたりのすすきの穂には、まだ雨のし

ずっとが光っていました。川は、いつもは水がないのですが、三日もの雨で水がどっと増していました。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきや草の株が、黄色くにごった水に横倒しになつて、もまれています。ごんは川下の方へと、ぬかるみ道を歩いていきました。

ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、そうつと草の深いところへ歩きよつて、そこからじつとのぞいてみました。

「兵十だな」と、ごんは思いました。兵十はぼろぼろの黒いきものをまくし上げて、腰のところまで水にひたりながら、魚をとるはりきりという網をゆすぶつていました。はしまきをした顔の横つちようには、まるい萩の葉が一枚、大きな黒子みたいにへばりついていました。

しばらくすると、兵十は、はりきり網の一番後ろの袋のようになつたところを、水の中から持ち上げました。その中には、芝の根や、草の葉や、くさつた木ぎれなど、ごちやごちや入つていましたが、でもところどころ、白いものがきらきら光っています。それは、太いうなぎの腹や大きなきすの腹でした。兵十は、びくの中枢へ、そのうなぎやきすを、ごみと一緒にぶちこみました。そして、また袋の口をしばって、水の中へ入れました。

兵十はそれから、びくをもつて川から上がり、びくを土手においといて、何を探しにか、川上の方へかけていきました。

兵十がいなくなると、ごんは、ぴよいと草の中からとび出して、びくのそばへかけつけました。ちよいといたずらがしたくなつたのです。ごんはびくの中の魚をつかみ出しては、はりきり網のかかっているところより下手の川の中を目がけて、ぽんぽん投げ込みました。どの魚も「とぼん」と音を立てながら、にごった水の中へもぐりこみました。

一番しまいに、太いうなぎをつかみにかかりましたが、何しろ、ぬるぬるとすべり抜けるので、手ではつかめません。ごんはじれつたくなつて、頭をびくの中につつこんで、うなぎの頭を口にくわえました。うなぎは、キュッと言つてごんの首へ巻きつきました。そのとたんに兵十が、向こうから「うわアぬすと狐め」と怒鳴りたてました。ごんは、びっくりして飛び上りました。うなぎを振り捨てて逃げようとしたが、うなぎは、ごんの首に巻きついたまま離れません。ごんはそのまま横つとびに飛び出して一生懸命に逃げていきました。

ほら穴の近くの、はんの木の下で振り返って見ましたが、兵十は追っかけては来ませんでした。

ごんは、ほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やつとはずして、穴の外の草の葉の上にのせておきました。

## 二

十日ほど経つて、ごんが弥助やすけというお百姓の家の裏を通りかかりますと、そこのいちじくの木のかげで、弥助の家かない内がおはぐろをつけていました。鍛冶屋かじやの新兵衛しんべえの家の裏を通ると、新兵衛の家内が髪をすいていました。ごんは、「ふふん、村に何があるんだな」と、思いました。

「何だろう、秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが」

こんなことを考えながらやつて来ますと、いつの間にか、表に赤い井戸のある、兵十の家の前へ来ました。その小さな、壊れかけた家の中には、大勢おおぜいの人が集まつていました。よそいきの着物を着て、腰に手拭てぬぐいをさげたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きな鍋なべの中では、何かぐずぐず煮えていました。

「ああ、葬式だ」と、ごんは思いました。

「兵十の家のだれが死んだんだろう」

お午<sup>ひる</sup>がすすぐると、ごんは、村の墓地へ行つて、六地藏<sup>ろくじぞう</sup>さんのかげに隠れていました。いいお天氣で、遠く向こうには、お城の屋根瓦<sup>やねがわら</sup>が光っています。墓地には、彼岸花<sup>ひがんばな</sup>が、赤い布<sup>きれ</sup>のように咲きつづいていました。と、村の方から、カーン、カーン、と、鐘<sup>かね</sup>が鳴つてきました。葬式の出る合図<sup>あいざ</sup>です。

やがて、白い着物を着た葬列のものたちがやつて来るのがちらちら見えはじめました。話し声も近くなりました。葬列は墓地へ入つてきました。人々が通つたあとには、彼岸花が、踏み折られていきました。

ごんは伸びあがつて見ました。兵十が、白いかみしもをつけて、位牌<sup>いはい</sup>をささげています。いつもは、赤いさつま芋<sup>いも</sup>みたいな元気のいい顔が、今日は何だかしおれていました。

「ははん、死んだのは兵十のおつ母<sup>かあ</sup>だ」

ごんはそう思いながら、頭をひっこめました。

その晩、ごんは、穴の中で考えました。

「兵十のおつ母は、床<sup>とこ</sup>についていて、うなぎが食べたいと言つたにちがない。それで兵十がはりきり網を持ち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、う

なぎをとつて来てしまった。だから兵十は、おつ母にうなぎを食べさせることができなかつた。そのままおつ母は、死んじやつたにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思いながら、死んだんだろう。ちょッ、あんないたずらをしなけりやよかつた』

### 三

兵十が、赤い井戸のところで、麦をといでいました。

兵十は今まで、おつ母と『ふたりきりで、貧しい暮らしをしていたもので、おつ母が死んでしまつては、もう一人ぼっちでした。

「おれと同じ『一人ぼっちの兵十か』

こちらの物置ものおきの後ろから見ていたごんは、そう思いました。

ごんは物置のそばをはなれて、向こうへ行きかけますと、どこかで、いわしを売る声がします。

「いわしの安売りだア。活きのいいいわしだアい」

ごんは、その威勢のいい声のする方へ走つていきました。と、弥助やすけのおかみさん

が、裏戸口から「いわしをおくれ」と言いました。いわし売は、いわしのかごをつんだ車を、道ばたにおいて、ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで、弥助の家の門へもってはいました。ごんはそのすきまに、かごの中から五、六匹のいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。そして、兵十の家の裏口から、家の中へいわしを投げこんで、穴へ向かつてかけもどりました。途中の坂の上で振り返つて見ますと、兵十がまだ、井戸のところで麦をといいでいるのが小さく見えました。ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ良いことをしたと思いました。

次の日には、ごんは山で栗をどつさり拾つて、それをかかえて、兵十の家へ行きました。裏口からのぞいて見ますと、兵十は、午飯を食べかけて、茶椀を持ったまま、ぼんやりと考え込んでいました。変なことには、兵十のほつぺたにかすり傷がついています。「どうしたんだろう」とごんが思つていますと、兵十がひとりごとをいいました。

「いつたいだれが、いわしなんかをおれの家へ放り込んでいったんだろう。おかげでおれは、盜人と思われて、いわし屋のやつに、ひどい目にあわされた」と、ぶつぶつ言っています。

ごんは、これはしまったと思いました。かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんな

ぐられて、あんな傷までつけられたのか。

ごんはこう思いながら、そっと物置の方へまわってその入口に、栗をおいて帰りました。

次の日も、その次の日もごんは、栗を拾っては、兵十の家へ持ってきてやりました。その次の日には、栗ばかりでなく、まつたけも二、三本持っていました。

#### 四

月のいい晩でした。ごんは、ぶらぶら遊びに出かけました。中山さまのお城の下を通つて少し行くと、細い道の向こうからだれか来るようです。話し声が聞こえます。チンチロリン、チンチロリンと松虫が鳴っています。

ごんは、道の片側に隠れて、じつとしていました。話し声はだんだん近くなりました。それは、兵十と加助かすけというお百姓でした。

「そうそう、なあ加助」と、兵十が言いました。

「ああん？」

「おれあ、このごろ、とても不思議なことがあるんだ」

「何が？」

「おつ母が死んでからは、だれだか知らんが、おれに栗やまつたけなんかを、毎日毎日くれるんだよ」

「ふうん、だれが？」

「それがわからんのだよ。おれの知らんうちに、おいていくんだ」  
ごんは、二人のあとをつけていきました。

「ほんとかい？」

「ほんとだとも。うそと思うなら、あした見に来いよ。その栗を見せてやるよ」「へえ、変なこともあるもんだなア」

それなり、二人はだまつて歩いていきました。

加助がひよいと、後ろを見ました。ごんはびくつとして、小さくなつて立ち止まりました。

加助は、ごんには気がつかないで、そのままさつさと歩きました。  
吉兵衛きちべえというお百姓の家まで来ると、二人はそこへ入つていきました。ポンポンポンポンと木魚もくぎょの音がしています。窓の障子しょうじにあかりがさしてて、大きな坊主頭ぼうずあたまがうつって動いていました。ごんは「お念佛があるんだな」と思いながら井戸のそばにしゃがんでいました。しばらくすると、また二人ほど、人がつれだつて吉兵衛の

家へ入つていきました。お経を読む声が聞こえて来ました。

## 五

「ごんは、お念佛がすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。兵十と加助は、また一緒に帰つていきます。ごんは、二人の話を聞こうと思つて、ついていきました。兵十の影法師かげほうしをふみふみいきました。

お城の前まで來たとき、加助が言い出しました。

「さつきの話は、きっと、そりやあ、神さまのしわざだぞ」

「えつ？」と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。

「おれは、あれからずつと考えていたが、どうもそりや人間じやない。神さまだ。神さまが、お前がたつた一人になつたのをあわれに思わつしゃつて、いろんなもの恵んでくださるんだよ」

「そうかなあ」

「そうだとも。だから、毎日神さまにお礼を言うがいいよ」

「うん」

ごんは、へえ、こいつはつまらないと思いました。おれが、栗やまつたけを持って行つてやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神さまにお礼を言うんじやア、おれは、引き合わないなあ。

## 六

そのあくる日も、ごんは栗をもつて兵十の家へ出かけました。兵十は物置で繩をなつていました。それでごんは家の裏口から、こっそり中へ入りました。

そのとき兵十は、ふと顔をあげました。と、狐が家の中へはいったではありますか。こないだうなぎを盗みやがったあのごん狐めが、またいたずらをしに来たな。

「ようし」

兵十は立ちあがつて、納屋にかけてある火縄銃ひなわじゅうをとつて、火薬をつめました。

そして足音をしのばせて近寄つて、いま戸口を出ようとするごんを、ドンと、うちました。ごんは、ばたりと倒れました。兵十はかけよつて来ました。家中を見ると、土間に栗が、かためておいてあるのが目につきました。

「おや」と兵十は、びっくりしてごんに目を落としました。

「ごん、お前まいだつたのか。いつも栗をくれたのは」

「ごんは、ぐつたりと目をつぶつたまま、うなずきました。

兵十は火縄銃をぱたりと、とり落としました。青い煙が、まだ筒口つっぐちから細く出ていました。

# よだかの星

宮沢 賢治



よだかは、実にみにくい鳥です。

顔は、ところどころ味噌みそをつけたようにまだらで、くちばしは、ひらたくて耳までさけています。

足は、まるでよばよばで、一間いっけんとも歩けません。

ほかの鳥は、もう、よだかの顔を見ただけでも、いやになってしまふという工合ぐあいでした。

たとえば、ひばりも、あまり美しい鳥ではありませんが、よだかよりは、ずっと上だと思つていましたので、夕方など、よだかにあうと、さもさもいやそうに、しんねりと目をつぶりながら、首をそっぽへ向けるのでした。もっと小さなおしゃべりの鳥などは、いつでもよだかのまつこうから悪口あつこうをしました。

「へン。また出て來たね。まあ、あのさまをごらん。ほんとうに、鳥の仲間のつらよごしだよ」

「ね、まあ、あの口の大きいことさ。きっと、かえるの親類か何かなんだよ」

こんな調子です。おお、よだかでないただのたかならば、こんな生なまはんかのちいさい鳥は、もう名前を聞いただけでも、ぶるぶるふるえて、顔色を変えて、からだをちぢめて、木の葉のかげにでも隠れたでしょう。ところが夜だかは、ほんとうは

鷹の兄弟でも親類でもありませんでした。かえって、よだかは、あの美しいかわせみや、鳥の中の宝石のような蜂すずめの兄さんでした。蜂すずめは花の蜜をたべ、かわせみはお魚を食べ、夜だかは羽虫をとつてたべるのでした。それによだかには、するどい爪もするどいくちばしもありませんでしたから、どんなに弱い鳥でも、よだかをこわがる筈はずはなかつたのです。

それなら、たかという名のついたことは不思議なようですが、これは、一つはよだかのはねが無暗に強くて、風を切つて翔けるときなどは、まるで鷹のように見えたことと、も一つはなきごえがするどくて、やはりどこか鷹に似ていた為です。もちろん、鷹は、これをひじょうに気にかけて、いやがつていきました。それですから、よだかの顔さえ見ると、肩をいからせて、早く名前をあらためろ、と言うのでした。

ある夕方、とうとう、鷹がよだかのうちへやつて参りました。

「おい。居るかい。まだお前は名前をかえないのか。ずいぶんお前も恥知らずだな。お前とおれでは、よっぽど人格がちがうんだよ。たとえばおれは、青いそらをどこまでも飛んで行く。おまえは、曇つて薄暗い日か、夜でなくちゃ、出て来ない。それから、おれのくちばしやつめを見ろ。そして、よくお前のとくらべて見

るがいい」

「鷹さん。それはあんまり無理です。私の名前は私が勝手につけたのではありません  
ん。神さまから下さったのです。」

「いいや。おれの名なら、神さまから貰もらつたのだといつてもよかろうが、お前のは、  
いわば、おれと夜と、両方から借りてあるんだ。さあ返せ」

「鷹さん。それは無理です」

「無理じやない。おれがいい名を教えてやろう。市蔵いちぞうというんだ。市蔵とな。い  
い名だろう。そこで、名前を変えるには、改名の披露ひろうというものをしないといけな  
い。いいか。それはな、首へ市蔵と書いたふだをぶらさげて、私は以来市蔵と申  
しますと、口上こうじょうをいって、みんなの所をおじぎしてまわるのだ」

「そんなことはとても出来ません」

「いいや。出来る。そうしろ。もしあさつての朝までに、お前がそうしなかつたら、  
もうすぐ、つかみ殺すぞ。つかみ殺してしまっから、そう思え。おれはあさつて  
の朝早く、鳥のうちを一軒ずつまわって、お前が来たかどうかを聞いてあるく。  
一軒でも来なかつたという家があつたら、もう貴様もその時がおしまいだぞ」

「だつてそれはあんまり無理じやありませんか。そんなことをする位なら、私はも

う死んだ方がましです。今すぐ殺してください」

「まあ、よく、あとで考えてごらん。市蔵なんてそんなにわるい名じやないよ」

鷹は大きなはねを一杯にひろげて、自分の巣の方へ飛んで帰つて行きました。

よだかは、じっと目をつぶつて考えました。

(一　たい僕は、なぜこうみんなにいやがられるのだろう。僕の顔は、味噌をつけた  
ようで、口は裂けてるからなあ。それだって、僕は今まで、なんにも悪いことを  
したことがない。赤ん坊のめじろが巣から落ちていたときは、助けて巣へ連れて  
行つてやつた。そしたらめじろは、赤ん坊をまるでぬす人からでも取り返すよう  
に僕から引き離したんだなあ。それからひどく僕を笑つたつけ。それにああ、今  
度は市蔵だなんて、首へふだをかけるなんて、つらい話だなあ)

あたりは、もう薄暗くなつていました。夜だかは巣から飛び出しました。雲が意  
地悪く光つて、低くたれています。夜だかはまるで雲とすれすれになつて、音なく  
空を飛びまわりました。

それからにわかによだかは口を大きくひらいて、はねをまっすぐに張つて、まる  
で矢のようにそらを横切りました。小さな羽虫が幾匹も幾匹もその咽喉に入りま  
した。

からだがつちにつくかがないうちに、よだかはひらりとまたそらへはねあがりました。もう雲は鼠色ねずみいろになり、向こうの山には山焼けの火がまっ赤です。

夜だかが思い切って飛ぶときは、そらがまるで二つに切れたように思われます。一ぴきの甲虫かぶとむしが、夜だかの咽喉にはいって、ひどくもがきました。よだかはすぐそれを呑みこみましたが、その時何だかせなかがぞつとしたようにはいました。雲はもうまっくろく、東の方だけ山やけの火が赤くうつって、恐ろしいようです。よだかはむねがつかえたように思いながら、またそらへのぼりました。

また一ぴきの甲虫が、夜だかののどに入りました。そしてまるでよだかの咽喉をひっかいてばたばたしました。よだかはそれを無理にのみこんでしまいましたが、その時、急に胸がどきっとして、夜だかは大声をあげて泣き出しました。泣きながらぐるぐるぐるぐる空をめぐったのです。

(ああ、甲虫やたくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのただ一つの僕がこんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。ああ、つらい、つらい。僕はもう虫をたべないで餓死おうしきする。いやその前にもう鷹が僕を殺すだろう。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空を行つてしまおう)

山焼けの火は、だんだん水のように流れてひろがり、雲も赤く燃えているよう

です。

よだかはまっすぐに、弟の川せみの所へ飛んで行きました。きれいな川せみも、丁度起きて遠くの山火事を見ていた所でした。そしてよだかの降りて来たのを見て言いました。

「兄さん。こんばんは。何か急のご用ですか」

「いいや、僕は今度遠い所へ行くからね、その前ちょっとお前に遭いに來たよ」

「兄さん。行っちゃいけませんよ。蜂雀はちづくずめもあんな遠くにいるんですし、僕ひとりぼっちになつてしまふじやありませんか」

「それはね。どうも仕方ないのだ。もう今日は何も言わないでくれ。そしてお前もね、どうしてもとらなければならぬときのほかは、いたずらにお魚を取つたりしないようにしてくれ。ね、さよなら」

「兄さん。どうしたんです。まあ、もうちょっとお待ちなさい」

「いや、いつまで居てもおんなじだ。はちすづめへ、あとでよろしく言つてやってくれ。さよなら。もうあわないよ。さよなら」

よだかは泣きながら自分のお家うちへ帰つて参りました。みじかい夏の夜はもう明けかかっていました。

羊歯の葉は、よあけの霧を吸つて、青くつめたくゆれました。よだかは高くきしきしきしと鳴きました。そして巣の中をきちんとたづけ、きれいにからだ中のはねや毛をそろえて、また巣から飛び出しました。

霧がはれて、お日さまがちょうど東からのぼりました。夜だかはぐらぐらするほどまぶしいのをこらえて、矢のように、そつちへ飛んで行きました。

「お日さん、お日さん。どうぞ私をあなたの所へ連れてつてください。灼<sup>や</sup>けて死んでもかまいません。私のようなみにくいからだでも焼けるときには小さなひかりを出すでしよう。どうか私を連れてつてください」

行つても行つても、お日さまは近くなりませんでした。かえつてだんだん小さく遠くなりながらお日さまが言いました。

「お前はよだかだな。なるほど、ずいぶんつらかろう。今夜そらを飛んで、星にそ  
うたのん<sup>で</sup>ごらん。お前はひるの鳥ではないのだからな」

夜だかはおじぎを一つしたと思いましたが、急にぐらぐらしてとうとう野原の草の上に落ちてしましました。そしてまるで夢<sup>ゆめ</sup>を見て いるようでした。からだがずうっと赤や黄の星のあいだをのぼつて行つたり、どこまでも風に飛ばされたり、また鷹が来てからだをつかんだりしたようでした。

つめたいものがにわかに顔に落ちました。よだかは眼（まなこ）をひらきました。一本の若いすすきの葉から露（つゆ）がしたたつたのでした。もうすっかり夜になつて、空は青ぐろく、一面の星がまたたいていました。よだかはそらへ飛びあがりました。今夜も山やけの火はまつかです。よだかはその火のかすかな照りと、つめたいほしあかりの中をとびめぐりました。それからもう一ぺん飛びめぐりました。そして思い切つて西のそらのあの美しいオリオンの星の方に、まっすぐに飛びながら叫（さけ）びました。「お星さん。西の青じろいお星さん。どうか私をあなたのところへ連れてつてください。灼けて死んでもかまいません」

オリオンは勇ましい歌をつづけながらよだかなどはてんで相手にしませんでした。よだかは泣きそうになつて、よろよろと落ちて、それからやつとふみとまつて、もう一ぺんとびめぐりました。それから、南の大犬座の方へまっすぐに飛びながら叫びました。

「お星さん。南の青いお星さん。どうか私をあなたの所へつれてつてください。や

けて死んでもかまいません」

大犬は青や紫（むらさき）や黄（き）やうつくしくせわしくまたたきながら言いました。

「馬鹿を言うな。おまえなんか一体どんなものだい。たかが鳥じやないか。おまえ

のはねでここまで来るには、億年兆年億兆年だ

そしてまた別の方を向きました。

よだかはがつかりして、よろよろ落ちて、それからまた二へん飛びめぐりました。それからまた思い切って北の大熊星おおぐまぼしの方へまっすぐに飛びながら叫びました。「北の青いお星さま、あなたの所へどうか私を連れてってください」

大熊星はしづかに言いました。

「余計なことを考えるものではない。少し頭をひやして来なさい。そういうときは、氷山の浮いている海の中へ飛び込むか、近くに海がなかつたら、氷をうかべたコップの水の中へ飛び込むのが一等だ」

よだかはがつかりして、よろよろ落ちて、それからまた、四へんそらをめぐりました。そしてもう一度、東から今のぼった天あまの川がわの向う岸わきの鶯わしの星に叫びました。「東の白いお星さま、どうか私をあなたの所へ連れてつてください。やけて死んでもかまいません」

鶯は大風おおふうに言いました。

「いいや、とてもとも、話にも何にもならん。星になるには、それ相応の身分でなくちやいかん。またよほど金もいるのだ」

よだかはもうすっかり力を落としてしまって、はねを閉じて、地に落ちて行きました。そしてもう一尺で地面にその弱い足がつくというとき、よだかは俄かにのろしのようにそらへ飛びあがりました。そらのなかほどへ来て、よだかはまるで鷺が熊を襲う<sup>おそ</sup>うと起きするように、ぶるつとからだをゆすって毛をさかだてました。

それからキシキシキシキシッと高く高く叫びました。その声はまるで鷹でした。野原や林にねむっていたほかのとりは、みんな目をさまして、ぶるぶるふるえながら、いぶかしそうにほしざらを見あげました。

夜だかは、どこまでも、どこまでも、まっすぐに空へのぼつて行きました。もう山焼けの火はたばこの吸殻<sup>すいがら</sup>のくらいにしか見えません。よだかはのぼつてのぼつて行きました。

寒さにいきはむねに白く凍<sup>こわ</sup>りました。空気がうすくなつた為に、はねをそれはそれはせわしくうごかさなければなりませんでした。

それだのに、ほしの大きさは、さつきと少しも変わりません。つくるときは、ふいごのようです。寒さや霜<sup>しも</sup>がまるで剣のようによだかを刺<sup>さ</sup>しました。よだかははねがすっかりしごれてしましました。そしてなみだぐんだ目をあげてもう一ぺんそらを見ました。そうです。これがよだかの最後でした。もうよだかは落ちているのか、

のぼつてているのか、さかさになつてしているのか、上を向いているのかも、わかりませんでした。ただこころもちは安らかに、その血のついた大きなくちばしは、横にまがつてはいましたが、たしかに少しおらつておりました。

それからしばらく経つてよだかははつきりまなこをひらきました。そして自分のからだがいま燐の火のようないい美しい光になつて、しづかに燃えているのを見ました。

すぐとなりは、カシオピア座でした。天の川の青じろいひかりが、すぐうしろになつしていました。

そしてよだかの星は燃えつづけました。いつまでもいつまでも燃えつづけました。



# 羅生門

芥川龍之介



ある日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。  
広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹塗の剥げた、大きな  
円柱に、きりぎりすが一匹とまつてある。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この  
男のほかにも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二、三人はありそうなもの  
である。それが、この男のほかには誰もない。

何故かというと、この二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢餓とか  
いう災がつづいて起こった。そこで洛中のさびれ方は一通りではない。旧記によ  
ると、仏像や仏具を打碎いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、  
路ばたにつみ重ねて、薪の料に売っていたという事である。洛中がその始末である  
から、羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかつた。するとその荒れ  
果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。盜人が棲む。とうとうしまいには、引き取  
り手のない死人を、この門へ持つて来て、棄てて行くという習慣さえ出来た。そこ  
で、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪がつて、この門の近所へは足ぶみを  
しない事になつてしまつたのである。

その代わり、また鴉がどこからか、たくさん集まつて來た。昼間見ると、その鴉  
が何羽となく輪を描いて、高い鷺尾のまわりを啼きながら、飛びまわつてゐる。こ

とに門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻ごまをまいたようにはつきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄ついみに来るのである。——もつとも今日は、刻限こくげんが遅いせいか、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そろしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞ふんが、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襖あおの尻を据えて、右の頬に出来た、大きな面疱にきびを気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待つていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようという当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、四五日前に暇ひを出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微すいひしていた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかなりない。だから「下人が雨やみを待つっていた」というよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた」という方が、適當である。そのうえ、今日の空模様も少なからず、この平安朝の下人の Sentimentalism<sup>セントメナタリズム</sup>に影響した。申の刻下がりからふり出した雨は、いまだに上がるけしきがない。そこで、下人は、何

をおいても差し当たり明日<sup>あす</sup>の暮らしをどうにかしようとして——いわばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考え方をたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあつという音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した甍<sup>いらか</sup>の先に、重たくうす暗い雲を支えている。

どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでいる違<sup>いじま</sup>はない。選んでいれば、築土<sup>ついじ</sup>の下か、道ばたの土の上で、飢死<sup>うえじに</sup>をするばかりである。そうして、この門の上へ持つて来て、犬のように棄てられてしまえばかりである。選ばないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道を低徊<sup>ていかい</sup>した揚句<sup>あげく</sup>に、やっとこの局所へ逢着<sup>ほうちやく</sup>した。しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来るべき「盜人<sup>ぬすび</sup>になるよりほかに仕方がない」という事を、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。

下人は、大きな嚏<sup>くさり</sup>をして、それから、大儀<sup>たいぎ</sup>そうに立ち上がった。夕冷えのする京都は、もう火桶<sup>ひおけ</sup>が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に

遠慮なく、吹きぬける。丹塗の柱にとまつて いたきりぎりすも、もうどこかへ行つてしまつた。

下人は、頸<sup>くび</sup>をちぢめながら、山吹<sup>やまぶき</sup>の汗衫<sup>かざり</sup>に重ねた、紺<sup>かさみ</sup>の襖<sup>あおり</sup>の肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風<sup>うふう</sup>の患<sup>うれえ</sup>のない、人目にかかる惧<sup>おそれ</sup>のない、一晩樂にねられそくな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思つたからである。すると、幸い門の上の樓へ上がる、幅の広い、これも丹を塗つた梯子<sup>はしご</sup>が眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄<sup>ひじりづか</sup>の太刀<sup>たち</sup>が鞘<sup>さや</sup>走らないように気をつけながら、藁草履<sup>わらぞうり</sup>をはいた足を、その梯子の一一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の樓の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子<sup>ようす</sup>をうかがつていた。樓の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い髭の中に、赤く膿<sup>うみ</sup>を持つた面疱<sup>にきび</sup>のある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括つていた。それが、梯子を二、三段上つて見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこここと動かしているらしい。これは、その濁つた、黄色い光が、隅々に蜘蛛<sup>くも</sup>の巣をかけた天井裏に、揺れながら映つたの

で、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、守宮やもりのように足音をぬすんで、やつと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出来るだけ、平たいらにしながら、頸のぞを出来るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内のぞを覗いて見た。

見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸しがいが、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、知るのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるという事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だという事実さえ疑われるほど、土を捏ねて造った人形のように、口を開いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にころがっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなっている部分の影を一層暗くしながら、永久に啞おしの如く黙っていた。

下人は、それらの死骸の腐爛ふらんした臭気に思わず、鼻を覆つた。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を覆う事を忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪つてしまつたからだ。

下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中にうずくまっている人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、瘦せた、白髪頭の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片を持つて、その死骸の一つの顔を覗きこむように眺めていた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分的好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである。すると老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱をとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しづつ消えて行つた。そうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しづつ動いて來た。——いや、この老婆に対するといつては語弊があるかも知れない。むしろ、あらゆる惡に対する反感が、一分毎に強さを増して來たのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考えていた、飢死をするか盜人になるかという問題を、改めて持ち出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、飢死を選んだ事であろう。それほど、この男の惡を憎む心は、老婆の床に挿した松の

木片きぎれのよう<sup>に</sup>、勢いよく燃え上り出して<sup>いた</sup>のである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかつた。従つて、合理的には、それを善惡のいずれに片づけてよいか知らなかつた。しかし下人にとつては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くという事が、それだけ既に許すべからざる惡であつた。勿論、下人は、さつきまで自分が、盜人になる氣でいた事なぞは、とうに忘れていたのである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上がつた。そうして聖柄ひじりづかの太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよつた。老婆が驚いたのは言うまでもない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩いしゆみにでも弾かれたように、飛び上がつた。  
「おのれ、どこへ行く」

下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞ふさいで、こう罵ののしつた。老婆は、それでも下人をつきのけて行こうとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押しもどす。一人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合つた。しかし勝敗は、はじめからわかつてゐる。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへねじ倒した。丁度、鶏にわとりの脚のよう<sup>な</sup>、骨と皮ば

かりの腕である。

「何をしていた。言え。言わぬと、これだぞよ」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘さやを払つて、白い鋼はがねの色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙つている。両手をわなわなふるさせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球めだまがまぶたの外へ出そうになるほど、見開いて、瞼おしのようすに執拗しうねく黙つてゐる。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されているという事を意識した。そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎惡の心を、いつの間にか冷ましてしまつた。後に残つたのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔らげてこう言つた。

「己おれは檢非違使けいひたいしの府の役人などではない。今しおこの門の下を通りかかつた旅の者だ。だからお前に縄なわをかけて、どうしようというような事はない。ただ、今時分この門の上で、何をして居たのだか、それを己に話しさえすればいいのだ」と、老婆は、見開いていた眼を、一層大きくして、じつとその下人の顔を見守つた。まぶたの赤くなつた、肉食鳥のような、鋭い眼で見たのである。それか

ら、皺で、ほんと、鼻と一つになつた唇を、何か物でも噛んでいるように動かした。細い喉で、尖つた喉仏の動いているのが見える。その時、その喉から、鴉の啼くような声が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ伝わつて來た。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬘にしようと思うたのじや」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎惡が、冷やかな侮蔑と一緒に、心の中へはいって來た。すると、その氣色が、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪つた長い抜け毛を持つたなり、墓のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんな事を言つた。「成程な、死人の髪の毛を抜くという事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じやが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいな事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。

現在、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切つて干したのを、干魚だと言うて、太刀帶の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかるて死ななんだら、今でも売りに往んでいた事である。それもよ、この女の売る干魚は、味がよいというて、太刀帶どもが、欠かさず菜料に買つていたそうな。わしは、この女のした事が悪いとは思つていぬ。せねば、飢死をするのじやて、仕方がなくした事である。されば、今まで、わしのしていた事も悪い事とは思わぬぞよ。これと

てもやはりせねば、飢死をするじやて、仕方がなくする事じやわいの。じやて、  
その仕方がない事を、よく知つていたこの女は、大方わしのする事も大目に見て  
くれるであろう」

老婆は、大体こんな意味の事を言つた。

下人は、太刀を鞘さやにおさめて、その太刀の柄つかを左の手でおさえながら、冷然として、この話を聞いていた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持った大きな面にきび苞おを気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いている中に、下人の心には、ある勇気が生まれて來た。それは、さつき門の下で、この男には欠けていた勇氣である。そうして、またさつきこの門の上へ上つて、この老婆を捕えた時の勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇氣である。下人は、飢死をするか盜人になるかに、迷わなかつたばかりではない。その時のこの男の心もちからいえば、飢死などという事は、ほとんど、考える事さえ出来ないほど、意識の外に追い出されていた。

「きっと、そうか」

老婆の話が終ると、下人は嘲あざけるような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面にきび苞おから離して、老婆の襟えりがみ上をつかみながら、囁みつくよう

にこう言つた。

「では、己が<sup>おれ</sup>引剥<sup>ひはぎ</sup>をしようと恨むまいな。己もそうしなければ、飢死をする体なのだ」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとつた。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、わずかに五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとつた檜皮色<sup>ひわだいろ</sup>の着物をわきにかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、梯子の口まで、這つて行つた。そうして、そこから、短い白髪<sup>しらが</sup>を倒にして、門の下を覗きこんだ。外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。

下人の行方は、誰も知らない。

(大正四年九月)



# 蛆の効用

寺田寅彦



一〇 虻の効用



# 檸檬

梶井  
基次郎



49

24 檸檬



山月記

中島  
敦



28 山月記



高瀨舟

森  
鷗  
外



40 高瀨舟



# 歳棚に祭る神

柳田國男







走れメロス

太宰  
治



65

45 走れメロス



# 舞姫

森  
鷗  
外







# 墮落論

坂口  
安吾



35 雷|落|雷



# 銀河鉄道の夜

宮沢 賢治



205 銀河鉄道の夜



坊っちゃん

夏目  
漱石







# 学問のすすめ

福沢 諭吉



392 学題のすゝめ



夏目  
漱石

こころ



752 亂七八糟

89



# 人間失格

太宰  
治







# 遠野物語

柳田  
國男





# 本書収録作品の出典について

本書に収録した以下の作品は、全てインターネットの電子図書館「青空文庫」(<https://www.aozora.gr.jp/>) の作成ファイルを使用しました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

なお、収録にあたっては、読解の便宜のため、原文の趣旨を損なわない範囲で、表記を改め、一部の表現をより平易に書き直しています。

## ■『ばん狐』新見南吉

底本：「新美南吉童話集」岩波文庫、岩波書店

平成8年7月16日発行第1刷

平成9年7月15日発行第2刷

初出：「赤い鳥 復刊第三巻第一号」

昭和7年1月号

入力…林裕司

校正…浜野智

平成10年10月23日公開

平成24年5月8日修正

『よだかの星』宮沢賢治

底本…「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

平成元年6月15日第1刷発行

平成10年3月10日第4刷

底本の親本…「新修宮沢賢治全集 第八巻」筑摩書房

昭和54年5月

入力…佐々木美香

校正…野口英司

平成10年8月20日公開

令和7年2月2日修正

『羅生門』芥川龍之介

底本…「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房

昭和61年9月24日第1刷発行

平成9年4月15日第14刷発行

底本の親本・「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第一巻」筑摩書房

昭和46年3月5日初版第1刷発行

初出・「帝国文学」

大正4年11月号

入力・平山誠、野口英司

校正・もりみつじゅんじ

平成9年10月29日公開

令和4年7月16日修正

## 髓 —資料編—

令和7年9月18日 第一版発行

著作者 ただの洋楽好き  
発行者 しがない塾講師

本書に収録した読み物（『いん狐』『よだかの星』ほか）は全て  
パブリック・ドメイン（公共の財産）です。ただし、著者の執  
筆部分および本書の組版については、著作権法上の例外を除  
き、電子的または機械的な方法を問わず、無断で複製、転載、  
または情報の検索システムに保存する行為を禁じます。

Copyright © 2025 by Kunihiko Bessho. All Rights Reserved.